

# 【平成28年度 研究のまとめ】

## ◇研究主題◇

主体的に考える児童の育成  
～互いに深め合う協働的な学習を通して～

今年度は昨年度までの「進んで伝え合い学び合う児童の育成～思考を深める手だての工夫を通して～」から「主体的に考える児童の育成～互いに深め合う協働的な学習を通して～」へと研究主題を変更して1年目である。「伝え合い学びあう児童」から「主体的に考える児童」へと目指す児童像を転換し、さらに「協働的」というキーワードを副主題に盛り込んだ。自分の考えを持ち、それを基に交流し、話し合う中で新たな考えに到達することができるような授業を目指して、各学年で研究授業を行ってきた。

## 1 研究内容について

(1) 「互いに深め合う協働的な学び」を実現させるための各学年の取組み

評価	1回目	2回目
	1 年	
提案した手だて	(1)絵を動かしながら視覚的に「ちがい」を捉えさせる。 (2)説明する話型を提示し、話しながらブロック操作させる。	(1)ブロックを動かす操作活動を通して計算の仕方を考えさせる。 (2)操作活動によって考えたことをワークシートに書かせた。
効果	(1)既習事項を確認し、本時の学習問題へつなげることができて効果的であった。児童は、本時の学習問題においてもその方法を生かして考えていた。 (2)2列に並べたブロックを付けて1対1対応させ、話型を使いながら説明していた。	(1)ブロックを操作しながら、自分が考えた①13から1つずつ引いていく数え引き、②減減法の考え方、③減加法の考え方で計算の仕方を考えていた。 (2)思考の過程を友達や担任が分かりやすかった。ペア学習では、友達の説明について3段階で評価する相互評価を行った。児童は分かりやすく説明しようと努力し、聞く側も真剣に聞いていた。
反省点	(2)求差の場合は同じ数のブロックを動かした残ったブロックが「ちがい」になるが、「ちがい」に相当するブロックの方を動かしていた。教科書では、2列ではなく1列で考える方法をとっているが、実態としては初めてで1列で考えることは難しいと思う。	

2 年		
提案した手だて	「自分たちの力だけでまちたんけんをした」という思いを膨らませることができるように、仮想店舗でのロールプレイを取り入れた。	話合いの仕方を工夫して、発言をなるべく平等することで、全員が意欲的に参加をし、まち探検への思いを膨らませることができるようにする。
効果	考えたことをロールプレイの中で普段話を聞くことが苦手な児童でも、当事者意識を持って友達の話を聞こうとしていた。さらに、店舗で練習する場面では、机上で考えていただけでは足りなかったことを再考して加えるなど、自分たちの考えをさらに深めている姿が見られた。	考えたことを短冊に書く→短冊をホワイトボードに貼り共有→グループで順番に話し合うというように全員が話合いに参加できるようにした。話合いの手順を細かく示すことで、どのグループでも、特定の児童の意見で意思決定されることなく、全員の意思表示や発言が生かされる話合いをすることができた。
反省点	相互評価する手だてがなかったために、練習をした場で、自分たちで考えたマナーが本当によいものなのかどうかを客観的に確かめる機会がなかった。	場の設定が机を円形に並べた配置になっていたため、児童同士の距離が離れてしまい、意見を伝え合うことを難しくなってしまったので、場の設定を考慮する必要があった。
3 年		
提案した手だて	・友達がワークシートなどに示した考え方を、別の友達が説明するという手だて。	・ペアでのカードゲームの過程を既習事項を使って表すという手だて。
効果	・自分の考え方だけでなく、友達がどのように考えたかを説明しあうことで、深め合うことにつながった。	・カードゲームの過程をリットルマスや数直線に表すことで、小数のたし算が0.1のいくつ分という考え方できることに気付かせることができた。また、意欲的に取り組めた。
反省点	・考え方の多様さをよしとしがちで、その先の本来のねらいを十分に達成することができなかった。	・立てた式と表したゲームの過程とが、どう結びつくのかという点をしっかり理解させられなかった。
4 年		
提案した手だて	・段落構成図から、段落の入れ替えが可能かを友達と相談することで、筆者の構成の工夫に気付かせる。	①本文で上下に示すワークシートの工夫 ②グループで話合いをする際に、筆者の願いの具体に迫れるよう、使用例を自由に広げて考えさせる。
効果	・段落構成図を作ったことで、段落相互の関係や説得力を持たせる筆者の述べ方の工夫に気付かせることができた。	①ワークシートを上下に示すことは一目で違いが分かり、比べ読みさせる手だてとして有効だった。 ②本文を基に、グループで想像を広げなが

		ら筆者の願いに迫ったことで、思考が深まった。(深い読み取りになった)
反省点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・段落の入れ替えを考えさせることが筆者の工夫に気付かせる手だてとしては妥当とは言えず、かえって児童が混乱していた。また、話し合いではなく発表し合う学習で終わってしまった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・考えた使用例から筆者の願いに結び付ける際に、児童から十分に答えが出ていたにも関わらず、改めて問いかけてしまったことで、流れが止まってしまう場面があった。</li> </ul>
5 年		
提案した手だて	<ul style="list-style-type: none"> <li>・育てているカボチャが病気になったり虫がついたりという、児童にとって緊急事態を話し合いの題材とした。事前に、課題について調べ意見を持って臨ませた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>複数のゲストティーチャーの話を聞き、講話の内容を比べたり関連付けたりして考えをまとめた。</li> <li>PMI シートを活用した。</li> </ul>
効果	<ul style="list-style-type: none"> <li>必然性のある話題について取り上げたことにより、意欲的に取り組めた。</li> <li>事前に対策を調べ意見を持って授業に臨んだことにより、児童は発言しやすく、指導者は意図的指名ができた。</li> <li>早期発見、早期対策が大切なのが分かり、意欲的に栽培に取り組んだ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>複数のゲストティーチャーの話を聞いたことで、多方向から対象について考えることができた。</li> <li>分かったことを PMI シートにまとめたことで、それぞれの特徴を把握しやすくなり、根拠を明確にして発言し、聞いている児童は、発言の内容を的確に捉え納得したり反論したりできた。</li> </ul>
反省点	<ul style="list-style-type: none"> <li>本やインターネットで調べたことが基になった意見だったので、対策としての範囲が広く、今一步深まりに欠けた話し合いになってしまった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>仙台白菜を栽培する人の思いの共通点が考えにくく、児童の思考の流れをもっと生かした論点を工夫すべきだった。</li> </ul>
6 年		
提案した手だて	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークシートを活用し、四つの投書を段落に分けて整理することで、それぞれの筆者の工夫を一目で気付くことができるようにした。</li> <li>・ペア学習での意見交流。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・登場人物の心情に迫るための手だてとして、文章ではなく短い言葉（キーワード）で心情を考えさせ、それを共有し合うという活動を行った。(例 父：真剣、冷静、優秀 与吉じいさ：優しさ、無欲、感謝 母：心配、悲しみ、不安 等)</li> </ul>
効果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・児童は、段落ごとに内容を分けて書くこと（話題提示、意見、理由1・2、反論、まとめ）、意見を最初と最後の2回書いていること、理由を二つ挙げていることなどの工夫に気付くことができた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・単元の導入時から登場人物ごとに同じ活動を行ってきたことで、児童にも習熟が見られるようになり、より適切な言葉で心情を表すことができるようになった。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分が思いつかなかった友達の考えは青でメモするなど、新しく気付いた考えと自分の考えを分けて整理できた。</li> </ul>	
反省点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本文に立ち返らないと分からない内容もあるので、ワークシートを十分活用させるためにも、要約ではなく全文を整理して記入することが必要であった。</li> <li>・お互いの意見の発表に留まってしまい、交流して再考を促すような活動に発展させることはできなかった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・お互いの意見を比較・検討する場面を設けるためにグループ活動を取り入れたが、話し合いを活性化させるには至らなかった。考えを伝えるだけではなく、交流の中から再考することができるように、適切な論点を工夫する必要がある。</li> </ul>

## (2) 今年度の研究授業から見られた児童の変容 ～ 研究の反省より

<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の考え方を自分なりの言葉で友達に伝えようとする姿勢が見られ、少しずつではあるが表現力が身に付いてきた。</li> <li>・友達の考えを聞いて自分の考えを振り返り、更に考えることができるようになってきた。</li> <li>・研究授業において、話し合う見通しや場の設定を適切に設定することで、普段、聞くことが苦手だった子供も進んで意見を話したり、聞いたりする姿が見られた。</li> <li>・間違いや失敗を恐れることなく、様々な考え方に挑戦しようとするようになってきた。</li> <li>・繰り返し型を決めて話し合い活動を行ったため、やり方に慣れ、積極的に話し合う姿が見られるようになった。(型：①自分の考えを付箋に書く ②発表しながら付箋をグループで貼る ③仲間ごとにとまとめる ④自分の考えやグループで話し合ったことを書き加える。)</li> <li>・栽培に意欲的に取り組むようになった。</li> <li>・意見を短くまとめ付箋を提示しながら話し合ってきたことにより、根拠を明確にして話す習慣が付いた。</li> <li>・PMI シート活用は、自分の意見をまとめる際にも、相手の話を聞く際にも判断のよりどころになった。</li> <li>・グループでの話し合いを研究教科以外でも行っているため、児童に習熟が見られるようになり、効率的に話し合い活動を行うことができるようになった。</li> </ul>
---

## 2 成果と課題

### (1) 成果

#### ①「協働的な学習」の深化

「思考を深める手だての工夫」から「互いに深め合う協働的な学習」へと研究の方向性をより具体的に示したことにより、互いに深め合う場面での指導を意識して行うことができたと考える。

まず、単元のどの段階で協働的な学習を行うことが有効であるかについて研究を深めることができた。導入の段階ではゲームなどを用いて、関心・意欲を喚起することができた。終末の段階では単元を通して学んだこと、考えたことを整理し、共有することができた。また、各時間の中で継続して協働的な学

習に取り組むことで児童の習熟度が上がり、より意見の交流を深めることができるということも明らかになった。

次に協働的な学習の形態について研究を深めた。ペア学習からグループ学習、そして全体での意見交流という流れで学習を進めた学級が多く、個の考えが少しずつ全体へと伝わり、比較・検討を行うことで、より高次の考えへと発展する様子を見ることができた。また、一斉指導の中で交流を行うことで協働を深める授業も行われ、様々な協働学習の形態を明らかにすることができたと考える。

最後に、具体的な手だてについてである。各学年とも発達段階に合わせて、様々な手だてに取り組み、協働的な学習の深化に努めた。(下表参照)

表 協働を深めるために有効な各学年で行われた手だて一覧

学年	有効だった手だて
1年	・ワークシート ・ペア学習 ・相互評価 ・話型での説明
2年	・ロールプレイ ・短冊をホワイトボードで共有
3年	・ワークシート ・説明しあう活動 ・ゲームでの導入
4年	・ペア学習 ・グループでの付箋を活用した話合い
5年	・PMIシート ・ディベート的な話合い
6年	・ペア学習 ・付箋でキーワードを共有

シンキングツールや付箋、ホワイトボードなど、考えを整理するためのツールを活用した授業が多く見られた。また、付箋やカードに書き入れる内容も短いキーワードに限定するなど、考えたことをより分かりやすく、集約しやすくして活用する授業も見られた。

以上のことから、今年度は「協働的な学習」へとより意識して授業づくりを行い、「互いに深め合う」ための手だてを行うことで成果を得ることができた研究であったと考える。

### ②各教科における学習指導のあり方

昨年度に引き続き、複数教科で研究授業を行った。研究授業の際には、指導助言の先生方をお招きし、各教科における指導のあり方について御指導いただいた。研究以前の問題として、授業として教科の目標や単元のねらいを達成させることが大前提であるといえるであろう。諸先生方の御指導で、研究の視点だけでなく、教科の根幹に関わる部分についても理解を深めることができた。また、自分の研究教科だけではなく、他教科の先生方の御指導を一緒に受けることで、内容を共有することができたことも大きな成果である。

### ③研究授業のシステム化

今年度も研究授業のシステム化に取り組んだ。年度当初に研究授業の年間計画を立て、見通しを持って研究授業に臨んだ。研究授業当日は業間休みに指導助言の御指導をいただき、放課後は30分の検討会、そして次回研究授業の模擬授業を30分行った。時間をあらかじめ設定し、話合いの観点を明確にすることで、効率よく行うことができた。また、模擬授業前に学年部による指導案検討会を実施した。単元・教材などの妥当性や提案の具体性などについての話合いを持つことにより、多くの授業でテーマに迫る内容の提案ができた。

## (2) 課題

### ①「協働的な学習」の捉え

今年度の副主題に「協働的」というキーワードを取り入れて研究を進めてきた。各学年とも協働的な学習とはどのようなものなのかを探りながら1年間の実践を行ってきたが、ペア学習やグループ学習を基にした「共同的」な学習に終始してしまった感は否めない。4月当初、研究をスタートさせた時点で「協働」ということばの捉えをしっかりと行う必要があったと考える。単なるグループ学習だけでなく、本来の意味での「協働的」な学習とは何か、どのような理想の児童像を思い描くべきか、今後も議論を続ける必要がある。そのためにも先行研究などの事例を収集し、本校としての「協働的」な学習の捉えを明らかにしていきたい。

### ②複数教科おける研究の進め方

成果の部分でも触れた通り、複数教科で授業研究を進めてきたことには、自分の研究教科以外でも授業の在り方について学ぶことができるという効果があった。しかし、検討会での話合いでは、授業のねらいをいかに達成させるかということについて話し合うことが多くなってしまったのではないかと考える。授業を成立させる上ではとても重要なことではあるが、どうしても研究の視点からはなれてしまいがちであったことは課題として残る。また、複数教科ゆえに研究結果から共通の成果をまとめるのが難しかった。異なる教科同士でもまとめの段階では共通の成果を抽出することができるような、しっかりした研究の骨子を準備する必要があった。